March 2007

千里地理通信

関西大学地理学研究会会報　第56号
織田武雄先生追悼特集号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

Contents

Pages 1～5 ····
織田武雄先生追悼特集
織田武雄先生とのお訣れに当たって　末尾至行
織田先生の想い出　大石幸夫
織田先生の教育方法論　平岡昭利
織田先生の思い出　中村雅俊
心に残っていること　大槻恵美
二度の最終講義　三好唯義
ちょっと片想いの恩師　夛田祐子

Pages 5～6 ····
2006年度地理学実習
与論島調査報告
尊尊我無　久保佳美
与論島活性化の一助となれば　真鍋一弘

Page 6 ·····
奈良日帰り巡検報告　*白澤武蔵*

Pages 6～7 ····
共同国際研究集会「アジア文化交流のなかの沖縄とベトナム」報告
松井幸一

Page 7 ·····
学窓から
地理を一年間学んで　高腑篤志

Page 8 ·····
大学院生・学部生の業績
(2006. 1～2006. 12)

Pages 8～9 ····
教室だより

Page 9 ·····
行事予定

Page 10 ·····
随想
天六学舎に通ったころ　山田　誠

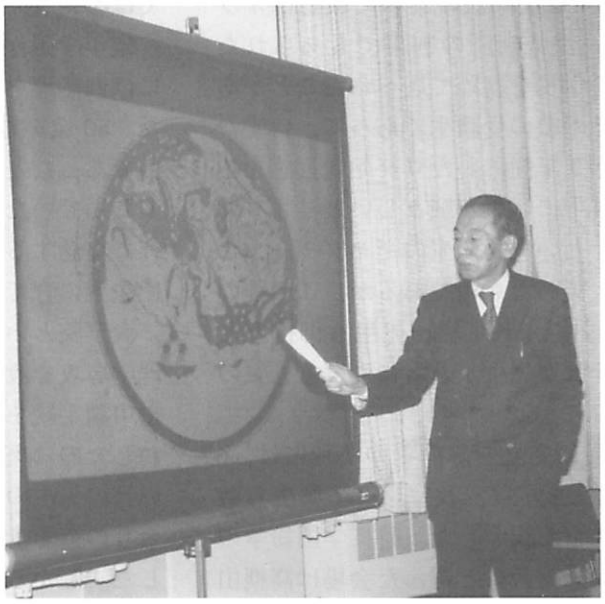
Pages 6～8 ····
2006年度卒業生の一言

織田武雄先生とのお訣れに当たって

末尾　至行

平成18（2006）年10月18日，織田武雄先生がお亡くなりになった。御年齢99歳。白寿をお祝いする宴の開催をと，かねがね想い描いていた計画があえなく霧消してしまった今となっては，只管悔恨の念に捉われるばかりである。

僕が関西大学地理学教室の創設に関わり始めたのは昭和41（1966）年の4月からであったが，幸い翌42年度から発足したばかりの史学科地理学専修に3年次生を受け入れることができ，昭和44（1969）年3月にはこれら1期生15名の巣立ちをみた。京都大学を定年退官される織田先生を関西大学にお迎えできたのはその2年後の昭和46（1971）年4月である。それ故，地理学教室の今に至る約40年の歴史からすれば，織田先生は正にその設立当初の礎を築くのに力を藉して下さった大恩人であったといってよい。



織田先生は僕の恩師であり，僕が6年余り京都大学の助手を勤めていた時の直属上司でもある。さらに昭和34（1959）年の京都大学による西南アジアの学術調査では，二人で地理班を編成し，乾燥イスラム圏の地域調査で4ヵ月間，苦楽をともにした探検仲間であった。そのような親近感に加えて，織田先生は日本地理学会や人文地理学会の会長を務められ，さらには全国の大学の大学院設置審査にも関わって居られた地理学界の大御所である。それ故，先生を関西大学にお招きできたことは僕独りの幸運に留まらず，地理学教室百年の計を図る上からも正に盤石を得たという想いであった。

織田先生はその高名にもかかわらず，決して偉がらず，特に若者を大事にされる美点を持って居られた。とりわけ孫のような年頃の女子学生には親切であった。研究棟の個室も実質，平岡昭利君らの院生に提供されていた。ただ，本務の講義となれば，整ったノート講義で必ず2度リピートされ，「書かんでもいいんですけど…」と仰りながら必要に応じて黒板にチョークで描かれる世界・日本の輪郭図や解説図なども，流石地図がお好きなだけに堂に入ったものであった。

常日頃，先生と御一緒していては書状を頂戴する機会もなく打ち過ぎていたが，昭和47（1972）年度に1年間イランに出張した際には，年末から年初にかけて急性肝炎を患って異郷で病臥中の身に，1月26日付で先生から見舞の書状を頂く始末となった。勿論，病状を気遣って下さる内容が主であったが，年明けで次年度の授業計画につき御苦労をおかけしている模様で，次のような文面がそれに続いている。「…いまの3回生は貴兄の授業を受けたことがなく，よく知らないようなので，来学年の4回生ゼミ，私と貴兄と二人で一応担当することにしました。…」

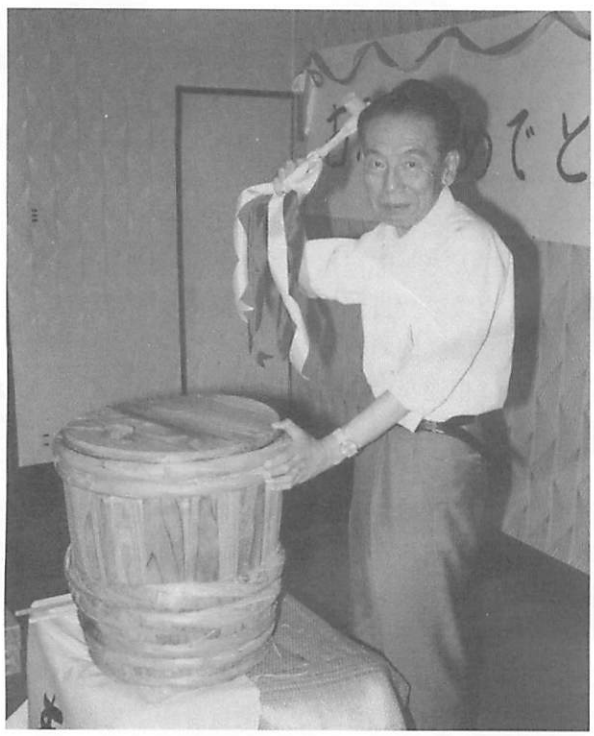
複数の教員が担当する授業は当時の関大文学部では異例であって，他の教室からは異論も出たに相違ない。しかし結果的にはこの二人担任制は実現をみた。昭和49（1974）年度卒業の中村雅俊君らの学年がそれである。二人の先生を前にしてさぞや十数名の学生諸君は重圧を感じたであろうが，実はこの授業は僕にとっても半ば苦痛であった。先生が学生諸君の前で僕にも意見を求められる都度，圧倒的に異なる先生との学問的見識の差に絶えず打ちのめされていたからである。さながら僕自身が学生時代にタイ

ムスリップした想いであった。

関西大学の規定によって，織田先生にも定年退職していただかねばならない時が来た。京都大学を63歳で定年退官されてから7年目，70歳を迎えられたその時である。その最終年の昭和53（1978）年3月4日には，慣例によって文学部会議室で最終講義をお願いした。先生が選ばれたのは勿論，ライフワークである地図史に関してのテーマである。スライドを用いてのご発表には他教室の教員も含めて数十名の聴衆をえた。ちなみに定年退職後も平成10（1998）年，御年齢92歳で『古地図の博物誌』（古今書院）を上梓されるに至っては，我等若輩からすれば正に驚異と言うほかはない。

御退職直前の昭和53（1978）年3月27日には，先生御夫妻をお招きして大阪市内で教室主催の送別会を開いたが，その席には久井忠雄法人理事長の御臨席をえた。先生の御尊父織田萬先生は国際法の泰斗で戦前はオランダにあるハーグ国際司法裁判所の判事でもあられたが，一時期，関西大学の学長を務めて居られたことがある。久井理事長は実はその頃の受講生であって，自ずから御子息の織田先生にも7年間にわたり終始親近感を抱いていて下さった。講義中に学生が騒々しいと「オダマンなさい」と窘められたという萬先生のギャグーー，この挿話を耳にして呵々大笑したものであるが，この種の諧謔精神は遺伝子的に引継がれて織田先生も御得意とされるところであり，それが先生が若者に受ける人気の一因でもあった。

この教室主催の送別会に先立ち，前年の7月には，6月29日の先生のお誕生日を承け，教室員・卒業生ら数十名が集って先生の古稀をお祝いした。時に学園紛争の火種が燻り続ける中，気分一新にと選んだ会場は高槻山



峡の静寂な湯宿である。卒業生の一人，相良直二郎君の実家（九州中津の醸造家）から贈られた樽酒も据えられ，お酒好きの織田先生のお喜び・お燥ぎの姿を目にしては参列者一同，しばし爽快・至福の時を過ごした。

定年で退かれた後も平成5（1993）年3月まで，先生には御無理を言って大学院の講義のみを御担当いただいた。80歳を越えての京都下鴨からの御通勤はさぞや難儀であったとお察しするが，熱心な院生を相手に授業を楽しんでいただけたものと信じている。目今，地図史研究に専念する三好唯義君，夛田祐子君らは，この期の織田先生に育てられた最後の教え子といえよう。

大学院といえば，先生と二人して，先ずは修士課程地理学専攻を設置した時の苦労を想い出す。カリキュラムや申請手続を確認すべく，東京都立大学の某教授をお訪ねしたのは暑い日であった。しかも東京の地理にお詳しい筈の先生の勘違いから，駒沢公園辺りから東南へ2km余りの道を歩くこととなる。僕の気持ちにはあせりが生じた。しかるにテニスコート脇に差し掛かると，何と先生はやおら腰を据えて煙草を燻らされ始めるではないか。プレーする若い女性に見とれてである。大学院審査に通暁して居られる故の余裕であろうが，僕はしばしその大人然とした先生のお姿に感動したものである。

織田先生，お蔭様で関西大学の地理学教室も併せて誕生した地理学研究会も成長を遂げ，今や全国に揺るぎない地位を確立することができました。先生の薫陶を受けて巣立った人材も，学界・教育界をはじめ社会の多方面にわたって幅広く活躍し，教室の名声を高めてくれています。長年にわたり，本当に有難うございました。

先生の御冥福をお祈りします。

（本学名誉教授）

表紙：「地図に見られる世界像」と題しての織田先生の最終講義（昭和53（1978）年3月4日撮影）

左：古稀祝賀会での織田先生ー高槻かじか荘にてー　先生による鏡開き（昭和52（1977）年7月2日撮影）

右上：同祝賀会にて古園ますみ君（昭和52年度卒）と熱唱されるお姿

織田先生の想い出

大石　幸夫

10月18日，突然の訃報であった。8月にお伺いした時もいつものように駐車場で見送って頂き，秋には北山へドライブに行こうとおっしゃっていたのに，……。

近年，先生は目のご病気のため，趣味の油絵も断念され，思うように読書もできないと零(こぼ)しておられたが，書棚には地理学，地図学の書物とともに，お好きな藤沢周平の時代小説が大切に仕舞ってあった。季節毎に種や球根を植え，お住(いす)まいの高清苑の皆さんに喜んでもらうべく，花づくりに勤しまれた。時には，お一人で叡電に乗り京の繁華街へと繰り出され，深夜の帰宅を管理人に叱られたと楽しそうに話された。また，病床の奥様を常に気遣われ，一昨年亡くなられた時も側(そば)に居られたことが本当に良かったと嬉しそうに話された。先生は優しく繊細であったが，おおらかなご性格でもあったように思う。

2003年11月，「関大で人文地理学会大会があるので，久しぶりに出席してみたい。」とおっしゃり，当日朝9時半にお迎えに行くと，すでに身支度を整えて待っていて下さった。途中，卒業生8人との先生を囲む昼食会にご出席頂いた後，学会会場へとご案内した。こちらの心配をよそに夜の懇親会にもご出席になり，お話が弾んだご様子であった。八瀬のご自宅へお送りしたのは夜9時半頃であったが，帰りの車中でも関西大学での人文地理学会大会へ出席できたこと，そして関大のスタッフや卒業生の活躍を本当に喜んでおられた。

一昨年の秋には，鯖街道を北上して三方五湖へご案内したが，梅丈岳から眼下の三方五湖，常神半島，遠くに敦賀半島，若狭湾を眺めながら，末尾至行先生や矢守一彦先生との若狭漁村調査のお話などを懐かしくされ，水文学による地域研究の可能性にも言及された。小浜では刺身定食をごちそうになり，小鯛笹漬けを妻へのおみやげに頂いた。

昨年春には，琵琶湖を眺めながらコーヒーを飲んで頂こうと，湖西路を北上した。安曇川町を走っている時，「小学校の遠足で，中江藤樹の生家まで田圃の中を4，5里も歩かされた。今なら，16キロぐらいである。」と距離換算もお手のもの。99歳を迎えられても，博学さ，行動力は30数年前の先生と何らお変わりがなかった。

思えば，学園紛争（1970年）の時，角材とヘルメットで武装した中核派の学生が先生に地誌学の講義を中止するように求めたのに対し，先生が二言三言話されると，彼らは退散，講義を続けられたことを鮮明に覚えている。体型から「かとんぼ」と渾名を呈上していた先生の学問に対する真摯な姿勢を垣間見た思いであった。その時に先生が黒板に描かれ，写し取ったカナートの平面図と断面図を今も高校での授業に使っている。

長年にわたるご指導に改めて感謝するとともに，心からご冥福をお祈りいたします。

（昭和48年度卒業，京都市立紫野高等学校）

織田先生の教育方法論

平岡　昭利

秋の夜，研究室に電話の音が鳴り響き，受話器を取ると大石君からで織田先生の突然の御逝去を知らせるものであった。百歳を目前にと愕然とした。先生に学部の専門演習の指導をしていただいてから，すでに40年近く，長く個人的に織田式教育法を受けてきた。その一端を回想したい。

学部の卒論は，瀬戸内海の家島諸島でまとめ，大学院進学後，修論はテーマを漁業か島かと迷ったが，漁業については，地図上で表すことが難しいため地理学の限界を感じていた。ある時，織田先生が欧文雑誌に沖縄東方の大東島が載っていることを示唆してくださり，その博学に驚いた。その時は別に気に留めなかったが，調べてみると Geographical Journal に載っていた。早速，春休みに南大東島に出かけた。その後，「こんな本があるぞ」と図書請求記号が付いていない『大東島誌』を私に手渡された。『大東島誌』は，戦前に南北大東島を所有した東洋製糖の社史であり，公共図書館では国会図書館や沖縄県立図書館くらいしか所蔵していなかった。先生が古本屋のカタログで見つけ，ポケットマネーで購入され，一大学院生に下さったのである。当時でも3万円くらいしたかと思う。これには私の方が驚き，ぶざまな修論は書けないと思い，大東島で真剣に調査を行った。修論の出来は，良かったのか悪かったのかは不明だが，とりあえず人文地理，地理学評論に投稿した。当時は投稿原稿が少なかったのか，すぐに掲載された。

織田先生の指導法は，一見，放任主義のように見えるが，その裏には細やかな気配りがあり，随所に学問的なすごみを感じさせた。また，酒の席にも幾度もお供をさせていただき　大変勉強になった。その長い学恩に少しでも報わねばと思っていたところ，先生から「秋の人文地理学会に来るのか，京都に寄らないか」と誘われていた。その矢先，先生との突然の別れがやって来ようとは。まさに痛恨の極みで，その夜は長い秋の夜となった。

（昭和48年度卒業，下関市立大学経済学部）

織田先生の思い出

中村　雅俊

末尾先生からお電話をいただき，織田先生が亡くなられたことを知ったのは，昨年10月のことであった。地理学教室同期の芋本隆裕さん（東大阪市教育委員会）と一緒に，お通夜に参列させていただいた。奈良の方に帰られる芋本さんとは短い時間しかお話し出来なかったが，随分と懐かしい思いを感じた。阪急電車に乗ってからも，織田先生への追憶が学生時代の思い出とともに幾つかよみがえってきた。

私ども13名は，4回生のゼミを織田先生にご担当いただいた。また，前年海外出張で大学を離れておられた

末尾先生も，ゼミのご担当ということになり，織田先生と末尾先生のお二人にお世話になるという，とてももったいないようなことになった。

ゼミ旅行は城崎温泉であった。どんな見聞をしたか記憶の闇にまぎれてしまったが，この旅行での城崎温泉の旅館と，織田先生が芸者さんの膝の上でお育ちになったという話が結びついている。多分，織田先生が旅館の女将か仲居さんにもてられたことと関係するようなのだが，先生のお父様も名士であられたが，宴席にお小さい頃の先生がお供をして，別室でお姉さん方に可愛がられたという話ではなかったかと思える。

先生のご専門は人文地理学の多岐にわたるが，中でも地図史の第一人者であった。そのため，各地で講演されることが多かった。たしか岐阜の方でのことではなかったか，いつも持参されるスライド一式をお忘れになったことに，会場で気づかれた。笑い話として，学生であった私には「困ったよ」とおっしゃたが，本当はスライドなどなくても，随分と興味深い講演をされたと思う。お人柄として，気さくに押し付けにならぬようにお話されるなかに，学問への姿勢などを随分とお示しいただいたと今でも有難く思っている。

先生方の研究棟の3階，階段のそばの一番端，いまの木庭先生の研究室は以前は末尾先生がお使いで，その前は私の記憶では織田先生のお部屋であったことになっている。そこに，講師として本学に来られていた藤岡謙二郎先生がソファーにくつろいでおられた。織田先生に用事があって研究室に闖入した私は，織田先生と藤岡先生という地理学の両巨頭の前で硬直したのであった。織田先生は決して怖い方ではなかったが，威厳に満ちた存在としての印象が強い。

卒業後，毎年年始には賀状をお届けしていた。ある年のお返事で，これからは返事を出さないから悪しからずとの文面であった。もちろんその後も，私は礼を欠かしたことはなかったが，やがて数年後また先生からお返事をいただけるようになった。先年，人文地理学会が関西大学を会場校として開催された時，その懇親会場に織田先生がお越しになった。背筋を伸ばした威風堂々のお姿，それが私が織田先生にお目にかかった最後になった。

先生のご冥福を，心よりお祈りしております。ありがとうございました。

(昭和49年度卒業，大阪市立扇町高等学校・本学非常勤講師)

心に残っていること

大槻　恵美

大学院で受けた織田先生の講義は，私には退屈だった。ノート講義だったからだ。先生がまさに「読む」。そして学生はひたすら書く。一言も漏らさないように，その内容を理解しようと努めながら。時に，フリーハンドで黒板に描かれる地図に魔法をかけられたように見とれる。今，よみがえってくる教室での思い出はこの二つに集約される。そしてこのやや堅苦しく学者らしい先生と，コンパなど教室以外の場面での，うちとけて「はしゃいで」おられる先生とのギャップも織田先生の印象をしっかりと彩っている。私が教えを受けた先生方のほとんどが織田先生の後輩か教え子に当たり，うちとけた様子でそういった先生方の様々なエピソードを語られるのだが，それがほとんどの場合，愉快な失敗談に満ちていて，そのような話を披露される時の織田先生は，向かうところ敵なしの様相だった。孫弟子に当たる学生達は，教えを受けている先生方もそんな「バカなこと」をしてたんだ，と気持ちが和んだ。

また，修士論文の試問の時に，地誌を試みたことを評価して，力づけて下さったことも強く心に残っている。一生懸命調査をして書いたことは確かだが，それが論文としてのまとまりをもっているとは自分でも思えなかった。とはいえ，思いどおりにまとめるには力不足で，研究は永遠に「過程」なのだと思い定めて提出したので，それを地誌として認めて下さったことはずいぶん励みになった。そして，私が先生の研究の意味を理解し始めたのは，教壇に立ってからである。『地図の歴史』を読み直して，先生が地図の思想に迫ろうとしておられることをやっと理解した。この本は面白いと思え，あの退屈だった講義はこれだったのだ，と「発見」できたことが嬉しかった。

(昭和53年度大学院修士課程修了，本学非常勤講師)

二度の最終講義

三好　唯義

私にとって織田武雄先生といえば，やはり古地図ということになる。先生は昭和53年3月末日で関西大学を定年退職されたが，最終講義は古地図をもって世界観をたどる，というものだったと記憶する。その時に3回生21歳だった私は，古い地図も案外に面白そうだと思った。また，卒論に向けて西洋地図に描かれた日本列島の変遷というテーマも教えていただいた。一年違っていれば，このような出会いなどなかったはずである。

大学院生の時は，織田先生の講義すべてに出席した。ある年など，先生が妙に力を込めて話をされたことがあったが，その講義内容が程なく一冊の本となったことに驚いた（『古地図の世界』1981年，講談社）。そして，昭和57年に神戸市立博物館の学芸員職を得てからは，古地図コレクションの展示や調査研究にお力添えいただいた。博物館世界において古地図資料などはマイナーな存在だが，先生の後ろ盾の御陰で，資料も私自身もおおいに助けられた。さらに，故秋岡武次郎博士収集の膨大な世界図関連資料を，神戸へ収めるべく尽力してくださったのも先生であった。偶然の重なりだろうが，その際に同じく労を執ってくださった東京の浅井辰郎先生も，昨年11月に91歳で逝かれた。

絵の好きな先生はよく博物館に来られたが，やがて私が図録や絵葉書を届けるようになった。亡くなられる10日前（10月8日）にも，オルセー美術館展のカタログ

を手に，お住いの京都八瀬の地を訪ねた。その時の先生は「来年の6月にはボクも百や」などとヘルパーさんとおしゃべりしながら，身支度一切を自らの手でなされた。そのお元気な様子を写真に撮り，同僚学芸員の小野田一幸君に報告したものであった。昼食後には，私が居たせいか，ワクワクからシーボルト図に至る日本像の変遷を蕩々と語り，きちんと纏めたいとも言われた。50歳の私は，先生から二度目の最終講義を受けることができたのだと思う。

織田武雄先生には感謝の言葉しか浮かばない。本当にありがとうございました。

（昭和54年度卒業，神戸市立博物館）

ちょっと片想いの恩師

夛田　祐子

関大に入学して間もない頃，手にした新書版『地図の歴史』が織田先生との出会いでした。奥付から，雲の上のような存在の先生が関大で教鞭を執っておられることを知り，2年次の講義を待ち遠しく感じたことが懐かしく思い出されます。『地図の歴史』がなかったら地図史に興味をもつきっかけに巡り会えなかったかもしれません。ご逝去直後の人文地理学会で，若手の先生方から「夛田さんは直接，織田先生に学ばれたのですよね」と羨望を込めて問いかけられた時に，関大では当たり前のように享受してきた「先生から講義を受ける」という幸運を改めて実感しました。

先生にまつわる個人的な思い出の一つに，京都会館で開催された人文地理学会の50周年記念大会があります。私は遅刻して会場に着いたため懇親会はすでに完売で，特別講演会後，諦めてお暇しようとしたときに，お会いした先生から「かまへんかまへん，出たらいいんや」と促されて，（そろそろ時効だと思うのですが）懇親会会費も支払わずに，もちろん名札に会費納入を示すシールも付けてもらえずに懇親会にのこのこと出席してしまいました。多くの先生から「織田先生がいいと許可されたのだから，いいのです」と追加承認までいただいて，居心地悪いながらも最後まで参加させていただきました。末尾先生が日頃より，「織田先生は偉いから地方の調査もやりやすかったし…大学院設置認可の申請も…」と話されていたことを思うと，人文地理学会における一人くらいの無銭飲食の認可くらいは序の口かもしれません。

ご逝去の報に接し，私にとっては，再び先生が雲の上に昇って行かれたように感じます。ご冥福をお祈りするとともに，先生にまみえた幸運に改めて感謝します。

（昭和60年度卒業，大阪市立都島工業高等学校）

■ □2006年度地理学実習　与論島調査報告□ ■

尊 尊 我 無

久保　佳美

沖縄本島からフェリーで4時間，青く澄んだ海に浮かぶ小さな島，与論島。人口約6000人，周囲約22キロメートルのサンゴ礁でできた小さな島である。人々は島を「ユンヌ」と呼び，そこには琉球の原風景が残されている。人々は自然と共に生活し，自然の恵みを大切にして生きている。

私たちは2006年10月3日～5日の間，与論島に滞在し，自然班（大金久海岸ビーチ），農業班（与論島の畜産とサトウキビ，土地活用），民俗（与論民俗村）・文化班（与論島の食文化），観光班（与論島の観光産業と交通），商業班（与論島のお土産と特産品開発）の5班に分かれ，それぞれに調査を行った。

私は文化班で，郷土料理と行事食を中心に島の食文化を調査した。島で栄養士をされている方や，郷土料理の保存に携わって昔ながらのお菓子作りを守りつつ新たな郷土料理の開発をされている方，特産品開発をされている方など，食を通してたくさんの人々と出会うことができた。与論島の郷土料理は「長寿食」としても注目され，現在では海洋療法（タラソテラピー）の一環として，島の観光事業のひとつとして食が見直されている。衣食住すべてを含めた昔ながらの生活スタイルが長寿につながる，といった研究も行われている。自然に逆らわず，自然にあるものを取り入れ，自然の恵みに感謝する。それが与論島の昔ながらの生活スタイルである。

島で出会った一人の女性が教えてくれた「まこと」の心，それは自分のためではなく，ひとのために真心を持って尽くすこと。与論島にはその「まこと」の心がいつまでも生き続けている。与論島で出会った人々は「まこと」の心を大切にし，私たちをあたたかく迎えてくれた。都会で生活を送る私たちにとって欠けてしまいつつある何かを思い出すことができたような気がした。心と心でつながり，相手のために心をこめて尽くすこと，それが与論島で得たものである。与論島の最大の魅力は，そこに住む人々のあたたかさ。私はこの調査でそんな風に感じた。

与論島で出会ったすべてのひとびとに，「尊尊我無」（ありがとう）。

（学部3回生）

調査中のスナップ（与論民俗村，前列左から3人目が筆者）

2006年度 卒業生の一言

池田大志
4年間楽しく勉強させていただきました。今後も地理を勉強していきたいです。

石井　碧
4年間お世話になりありがとうございました。先生方には私のような生徒にも丁寧に指導して頂き感謝しています。

石川晶子
4年間お世話になりました。いろいろご迷惑をおかけしましたが，4年間を通じて様々な事を学ぶことが出来ました。ありがとうございました。

金高友香
旅立ちの時。明日への地図を広げて歩き出す。桜吹雪の学び舎を後にして。胸いっぱいの想い出をありがとう。

新開奈央
この4年間，大好きな地理を楽しく学べたことをうれしく思います。

瀧　由佳
4年間地理を学んできました。様々な事を学ぶことができ，また，地理学を学ぶ仲間とも楽しく過ごすことができ，大変充実した4年間であったと思います。お世話になり，ありがとうございました。

与論島活性化の一助となれば

真鍋　一弘

2006年度10月3日から6日にかけて，奄美諸島の与論島で地理学実習の調査を実施した。自然，農業，民俗・食文化，商業，観光の5班に分かれ，それぞれの角度から調査に取り組んだ。

私が担当した商業班では，「与論島における土産物産業の実態と課題」というテーマのもと，主に土産物品に関する商品構成とそれら仕入れ先についての調査を行なった。その結果，与論島で売られている土産物品の大部分は，沖縄県や本州各地，あるいは海外を中心とした島外からの仕入れ品で，現地の特産品が極端に少ないことが判明した。

今回の実習調査では，調査結果をふまえた上で，島の活性化のため何らかの提言も盛り込んだ報告書にしようという密かな目標もあった。ここは各班とも頭を悩ませた部分であるが，単に地理的分析や実態の記述にとどまらず，そこから地域振興のヒントとなるような提言を加えようという意味では，例年とはまたひと味違った報告内容になったのではないかと思う。

我が班の提言は，「新たな黒糖菓子・焼酎の開発をはじめ，島独自の特産品づくりを」，「一目でわかる島内の土産物入手マップを作ればどうか」，「ご当地ソングを作り，もっと島のPRを」などである。実現が難しい発案もあるが，僅かでも与論活性化の一助となれば幸いに思う。地域や町づくりに貢献できるフィールドワークへと，寄せられる期待に違わない地理学を目指す研鑽の日々でありたい。

（博士前期課程1年）

■ □ 日帰り巡検報告 □ ■

奈良・郡山巡検

白澤　武蔵

2006年10月29日，小春日和のもと奈良盆地の日帰り巡検が行なわれ，2人の先生方（高橋先生，野間先生）と大学院生合わせて18名が参加した。テーマは鉄道，自然，町家，商店街，観光，環濠集落，金魚養殖，城下町など，地理学の様々な分野に及んだ。奈良市内では「奈良市とその周辺部における鉄道敷設」，「奈良盆地の地形と気候」，「奈良における特産品と東向商店街」，「観光都市奈良」，そして「ならまち」が取り上げられた。大和郡山市では「稗田環濠集落」，「金魚養殖」，「近世城下町」などのテーマに沿って巡った。東向商店街から興福寺への坂道は「登り窯」に由来するそうだ。かつて奈良盆地では綿花やイチゴ，スイカの栽培が盛んに行われた。大和郡山城の石垣の穴太衆積み，野面積みは朝鮮半島からの渡来人の技術につながるといわれる。暗がり峠と三条通がつながっている。などの説明を受けた。「現物を見ながら，これがそうですよ，と説明が出来るまでになってほしい」と先生方は強調された。そのためには現地を何回も何回も調査することが大事だとおっしゃられ，研究者の姿勢を教えられた。永らく奈良に住んでいる私にとっても学ぶことが多く，充実した一日だった。

▲郡山城址にて（後列右から6人目が筆者）

（博士前期課程2年）

■ □ 共同国際研究集会報告 □ ■

アジア文化交流のなかの沖縄とベトナム

松井　幸一

関西大学アジア文化交流研究センターと日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））「南海地域における琉球の歴史地理的実体と意味の総合的研究」の共同開催による共同国際研究集会が2007年2月16日・17日に沖縄で開催された。

16日は大阪からのメンバーに琉球大学の学生諸君も加わって，那覇市－名護市－今帰仁村－嘉手納町などを周るバス巡検を実施した。現地では高橋誠一（関西大学），貝柄徹（大手前大学），西岡尚也（琉球大学）の3先生方が説明役を務めた。名護市では琉球の古い集落形態が残る真喜屋集落を見学した。今帰仁村では今帰仁村教育委員会の宮城弘樹氏に案内いただき，集落から世界遺産の今帰仁城跡（今帰仁グスク）に至る古道「ハンタ道」を徒歩で登り，

▲真喜屋集落を歩く

▲共同国際研究集会（沖縄県立公文書館）

城跡や発掘現場を見学した。那覇への帰路に立ち寄った道の駅「かでな」では，市街地に隣接する広大な米軍基地を眼の前にした。

翌17日は南風原町の沖縄県立公文書館講堂において共同国際研究集会『アジア文化交流の中の沖縄とベトナム』（後援　沖縄地理学会・沖縄国際大学南東文化研究所）が開催された。高橋誠一（関西大学）「琉球の集落景観と石敢當－首里と壷屋－」，二階堂善弘（関西大学）「那覇久米村天尊廟の祭神について」，木津裕子（京都大学）「久米村家譜にみる若き通事たち」，チャン・アイン・トゥアン（ベトナム国家大学ハノイ校）「ベトナム史における歴史都市の消滅」，グエン・ドゥック・カー（ベトナム国家大学ハノイ校）「ベトナム史における地籍システムの認識」，グエン・カオ・フアン（ベトナム国家大学ハノイ校）「ハノイの都市化－歴史地理学的分析－」，平岡昭利（下関市立大学）「明治期における尖閣諸島への日本人の進出と古賀辰四郎」，野間晴雄（関西大学）「与論島における地域産業と伝統文化の継承・振興と交流－交錯する琉球・奄美文化圏の開放システムからの考察－」の8名による報告が行われ，総括討論では中国・ベトナム・琉球・日本を対象とした広範な議論が交わされた。

（博士後期課程1年）

■ □ 学窓から □ ■

地理を一年間学んで

高腑　篤志

地理を学び始めて早一年が経った。高校時代に地理を学ぶことのなかった私にとって，大学で専攻することに決めた地理はとても新鮮だった。とりわけ印象的だったことは年間を通していくつか行ったフィールドワークだった。前期にはチームで，後期には個人で調査を行い教室で発表した。

フィールドワークを通して感じたことは，今までの学校教育で学んできた地理と違い私たち自身が能動的に行動を起こさなければなれないということだった。私は高校時代に地理を学ぶことはなかったものの，小中学校の社会科の中では地理がとくに好きで，世界の首都を覚えたり地図を眺めたりすることが好きだった。しかし大学で新たに学び始めた地理は全くの別物だった。とりわけフィールドワークの際はそれが顕著で，調べることの多くは書面で記されていないことで，実際に現地を訪れてみて初めてわかることばかりだった。また今まで「見るもの」として考えていた地図やグラフを実際に自分で作ることは思いのほか難しく，どのような形で何を表記すればいいのか何度も頭を悩ませた。それは今まで慣れ親しんできた小中学校の地理が受動的なものであったとすれば，正に能動的で自分で考え自分で行動を起こさないといけないものだと感じた。

また後期の基礎演習では，各々が夏休みに調査したことを教室で発表しあい議論しあったのだが，それを通して改めて地理の研究対象の広さを感じた。テーマが自由であったこともあり，誰一人として同じテーマについて調査したものはいなかった。発表はどれも個性的で，商店街について調べた者や，少年野球チームの分布について調べた者もいた。中には東京と大阪，名古屋を比較しビラ配りの実態を調査した者さえいた。しかしどの発表も地理的な観点から調査されており，どんなことでも地理の研究対象になるのだと改めて感じた。

地理学生としての初年度はあっという間だった。自分の想像していたものと異なる面もあり戸惑いを感じることもあったが，研究対象が広く積極的に行動を起こすことが求められる地理を専攻したことは間違いではなかったと思っている。今年は遂に3回生。まずは地理学実習に向けて仲間と一緒に頑張っていきたい。

（学部2回生）

田中将也
4年間の集大成である卒業論文を無事仕上げることができ，ご指導下さった先生方には本当に感謝しています。本当にありがとうございました。

谷口　修
高橋先生をはじめ諸先生方のご指導のお陰で，地理学を通し多くのことを学ぶことが出来ました。ありがとうございました。

手島理沙
高校時代に地理を履修していなかった私ですが，大学で地理という学問に出会い，その楽しさと奥深さに衝撃を受けました。地理学に出会えて良かったです！

仲井泰晃
学生生活，様々な人にお世話になり過ごす事ができました。いい思い出ができ，楽しい4年間でした。

中島知美
もっと多くの学生に地理に興味を持って欲しいと思う反面，少人数だからこそ先生方の指導もたくさん受けることができたように思います。ありがとうございました。

野木香奈
自ら考えて行動する力がつきました。お世話になった先生方，地理学教室のみなさん本当にありがとうございました。

院生・学部生の業績（2006. 1～2006. 12）

【論文】

岡本訓明（2006）：「近代大阪における『軒切り』の展開について」，『歴史地理学』，第48巻第2号，pp. 19–40.

岡本訓明（2006）：「近代初頭の堺における軒庇の伐縮」，『史泉』，第104号，pp. 17–34.

岡本訓明（2006）：「近代那覇における都市構造」，『南島史学』，第68号，pp. 34–54.

片岡　健（2006）：「『長宗我部地検帳』による戦国末期土佐国の城下町景観」，中国四国歴史学地理学協会（史料翻刻）

荒武賢一朗・片岡　健（2006）：「東京大学法学部法制史資料室所蔵『大阪宗旨役所触扣』」（下）（共著），『大坂の歴史』，第68号，pp. 101–125.

【学会発表】

岡本訓明（2006）：「近代那覇における都市構造」，第35回　南島史学会大会（関西大学）

片岡　健（2006）：「黒岩城下町と柳瀬川水運」，四国中世史研究会

影山陽子・木庭元晴・白澤武蔵・貝柄　徹・佐藤ふみ（2006）：「粒度分析のためのレーザー回折法とピペット法の比較」，関西大学史学・地理学会大会（関西大学）

白澤武蔵・千葉太朗・木庭元晴（2006）：「大阪府の二三の考古遺跡から得られた無層理堆積層のX線像」，関西大学史学・地理学会大会（関西大学）

舟越寿尚（2006）：「街の顔と商店」，関西大学史学・地理学会大会（関西大学）

飼牛敬大（2006）：「飲食店の立地展開」，関西大学史学・地理学会大会（関西大学）

匡　达伶（2006）：「中国雲南省麗江市のエコツーリズムの展開」，関西大学史学・地理学会大会（関西大学）

曽我　傑（2006）：「過疎地や地方都市における地域住民の交通利用の実態－宮崎県高千穂町における町営バス・第三セクター鉄道の事例から－」，関西大学史学・地理学会大会（関西大学）

曽我　傑（2006）：「地方公共バス交通における規制緩和とコスト削減の功罪－宮崎県バス事業者における運行効率化対策の事例から－」，日本地理教育学会大会（沖縄国際大学）

松井幸一（2006）：「近代都市の骨格形成－岐阜を例に－」，関西大学史学・地理学会大会（関西大学）

的場貴之
高校生のときに想像していた地理の勉強とは全く違い，初めはかなりとまどいました。しかし，この4年間地理にどっぷりつかり諸先生方のご指導のもと，とても充実した4年間を過ごすことができました。ありがとうございました。

三香美晋一
2回生の時に西洋史から地理に移動してきましたが，地理に移動してきてほんとによかったと思います。

美島英幸
私は地理学を通して，最初の興味であった自然以外にも様々な事に興味を持つことができました。

山下未知留
大学の4年間で本当にたくさんの人たちと出会えたことが，今の私の糧になっています。出会いで吸収したものを今後も生かしていきたいと思います。

和田卓也
4年間地理学を学び，実地調査によって仮説を検証することの大切さを知りました。指導して下さった先生方，本当にありがとうございました。

加藤正貴
私は3年次に英文から地理に転入しました。2年間でしたが，手厚く指導いただきました。ありがとうございました。

教室だより

本号は織田先生追悼特集号である。末尾先生による冒頭の追悼文には，教室のあけぼの時代の織田先生と末尾先生のご活動の様子をくみ取ることができる。次に続く6名の方の文章には，織田先生への親しみと敬意，そして先生の指導力とお人柄がにじんでいる。なお，本号では通常掲載している研究ノートと現役教員による巻頭随筆を省略している。

学位取得者（2007年3月）

課程博士：　賀納章雄「南島における伝統的畑作穀類栽培に関する文化地理学的研究」

論文博士：　大槻恵美「場所の変容と生活に関する地理学的研究－地域と『風土』に生きる－」

日帰り巡検　ならまちと郡山

2006年10月29日（日）に日帰り巡検を実施しました。コースは以下の通りです。近鉄奈良線奈良駅－東向商店街－もちいどの通り－ならまち格子の家－奈良市史料保存館－三条通り－JR奈良駅－JR郡山駅－稗田環濠集落－郡山城址－近鉄郡山駅（現地解散）

第88回例会（研究例会）報告

関西大学地理学研究会第88回例会が2006年12月9日に関西大学文学部第3会議室で開催されました。初めての試みですが，今年は例会の冒頭に3回生と大学院生による実習調査の報告を行いました（代表して，川合はるな・河野俊英）。続く研究発表

会では，松原光也（博士課程後期課程）「吹田市の医療機関分布」，胎中啓紀（JTB 日本教育旅行大阪支店勤務）「地理学出身の旅行会社営業マン」，高橋誠一（本学教員）「与那国島の集落景観」の 3 発表があった。研究会の後に同会場で開かれた忘年会は，教員 4 名，卒業生 14 名，大学院生 12 名，学部生 13 名，計 43 名の出席を数え，大変な盛会となりました。

海外出張

橋本先生：2007 年 3 月 20～日 31 日，フィリピンのマニラ・バタン島（黒潮ルートのイモ栽培文化の調査）。

野間先生：2006 年 8 月 4 日～8 月 10 日，中国福建省・マカオ・香港視察（私費）。9 月 29 日～10 月 3 日，ベトナム（科研によるベトナム地理学史研究・ベトナム国家大学ハノイ校地理学部創立 45 周年記念学会で講演）。10 月 12 日～10 月 16 日，ベトナム（ベトナム国家大学理科大学創立 50 周年式典への参加，科研によるベトナム地理学史の調査）。2007 年 1 月 24 日～2 月 1 日，ラオス（科研によるラオス村落調査）。2 月 25 日～3 月 3 日，タイ（科研による東北タイ農村調査）。

伊東先生：2007 年 3 月末に在外研究（イギリス・オーストラリア，ニュージーランド）より帰国予定。

地理学実験室・資料室・製図室（旧実習室）が移転

千里山キャンパス第 1 学舎 A 棟改築工事に伴い，地理学実験室・資料室・製図室（旧実習室）が急遽移転を迫られることになり，去る 2007 年 1 月下旬に教員・大学院生・学部生のそれぞれ有志によって雑誌や書籍，地図，備品類の梱包作業を行いました（運搬は業者による）。3 月初めの時点で A 棟はほぼ無くなりました。

工事中の移転先は第 1 学舎 D 棟（4 階に現在の地理学実習室がある棟）1 階北側の D 110 教室・111 教室です。

D 111 教室に資料室・製図室の備品類を収納しました。以前に比べてかなり手狭になり，また備品の大部分は梱包が解かれていませんが，10 人分程度の机と椅子があり，授業や自習等で教室を使用できる状態です。110 教室は上下水道や電気の設備工事を施した後，新年度には地理学実験室として使用できる予定です。

行 事 予 定

▶地理学教室新入生・進学生歓迎会

2007 年 4 月 26 日（木）に地理学教室新入生・進学生（学部 2 回進学生，大学院博士前期・後期課程新入生・進学生）歓迎会を予定しています。

▶春の一泊（バス）巡検

日程は 2007 年 5 月 27 日（土）・28 日（日），巡検行先は和歌山県御坊市，日高町，湯浅町，海南市方面を予定しています。奮って御参加下さい。

▶日本地理教育学会大会

2007 年 8 月 4 日（土）～6 日（月），関西大学で日本地理教育学会大会が開催されます。8 月 4 日・5 日は大会，8 月 6 日は巡検（大阪市営地下鉄今里筋線沿線）を予定しています。御発表・御参加いただければ幸いです。

事務局だより

会費納付のお願い

関西大学地理学研究会では『千里地理通信』発行をはじめとする研究会活動を維持するために，会員の皆様に年会費 1000 円を納付いただいています。今回お送りする『千里地理通信』に「郵便振替振込書」を同封致します。大変お手数ですが，お近くの郵便局から為替でお振込いただきますよう，よろしくお願い致します。

原稿募集

千里地理通信では以下の原稿を募集しています。

1．「卒業生だより」：卒業生諸氏の近況報告を募集しています。（800 字程度）。
2．「学窓から」：在学中の学部生・院生の方から募集しています。日頃の学習・研究活動の様子をご報告下さい（800 字程度）。
3．「研究ノート」：日頃の研究成果をご報告下さい（図表を含めて見開き 2 頁，1500～2000 字程度）。

昨年の4月から大学院の「歴史地誌学特殊研究」という科目を担当している。千里山キャンパスへは学会出席のために訪れたことはあったものの，出講は初めてである。しかし私にとって，関西大学への出講はじつは今回が初めてではない。というのは，本稿のタイトルに掲げたように，かつて1年間，当時天六にあった関西大学の二部で講義を担当させていただいたことがあるからである。それは今から30年以上も前の1974年度のことであった。今の学部生諸君はもとより，院生のほとんども生まれていなかったはずである。

当時の私は，前年の11月に京都大学文学部の助手を退職し，11月から愛知県立大学の講師として赴任したばかりであった。新しい職場には地理学の専門書や学術雑誌が乏しかったため，私は名古屋でアパートを借りる傍ら，木曜夜には京都の実家に戻って，金曜か土曜に京大で研究資料を閲覧するという生活をすることにした。私がこうした名古屋と京都の二重生活をすることを，当時関大に勤めておられた先輩の青木伸好さん（後に京大；故人）が耳にされ，それがきっかけとなって関大への出講を依頼されたように記憶する。

随想

天六学舎に通ったころ

山田　誠

私が担当することになった科目は「人文地理学概説」という，史学科（たしかまだ史学地理学科という名称ではなかった）の必修科目であった。社会の教員免許取得のための科目も兼ねていたためか，結構受講者数は多く，100人前後の登録があったように思う。こちらがまだ若かった（開講時には28歳）のと二部だったことから，私よりも年長と思われる受講者もかなりの人数見受けられ，毎回緊張したものである。その講義で私は，前期には英語圏を中心とする欧米の現代地理学の方法論の展開過程を，そして後期には欧米の都市地理学の新しい研究動向を紹介した。今手元に残っているノートを見ると，ずいぶん背伸びした内容になっていて，自分でも十分には理解できていないことを話した箇所がかなり含まれていたようである。まさに若気の至りで，お恥ずかしいしだいである。

天六界隈は私にはまったく未知の土地であった。毎週の講義開始（18時45分だったと思う）までの時間的余裕は存分にあり，付近を一人で巡検することがいつでもできたはずなのに，実際にはそういうことはまったくしなかった。惜しいことをしたと反省している。また20時過ぎに講義が終わって，今ならどこかでビールでも1杯飲んでから帰宅という選択肢もありそうに思うが，当時は自分から積極的に飲酒をする習慣もなく，いつも実家に直行していた。むしろ，関大出講の前に京大を訪れた週には，当時京大文学部の教授であった水津一朗先生（故人）のお誘いを受けて，助手の高橋誠一さん（現関大）ともども夕方ビールを飲み，私だけその場を中座して講義開始に間に合うよう阪急に飛び乗るということが何度かあった。つまり関大では酒気帯び講義をしたということになる。それで誰かに迷惑をかけたというわけではないと思うが，あまり誉められた話ではない。

当時の関大地理学教室では，非常勤講師の出講日時にはどなたか専任の先生が講師控室で応対をしてくださることになっていたようで，私の出講する金曜夜の担当は，昨年天寿を全うされた織田武雄先生であった。先生は私の学部からD1までの指導教官であり，講師控室ではあたかも先生に毎週試問を受けているような緊張感を覚えた。

関大二部への出講を終えて以後，天六界隈を訪れる機会はほとんどなかったが，数年前，所用で長柄墓地に行った際に，久しぶりに天六学舎の現況を目にすることができた。学舎と天六の駅の間の道を歩くと，30年前にわずか1年間だけとはいえ毎週往復した日々が懐かしく思い出されたことであった。

（本学非常勤講師・京都大学教授）

千里地理通信　第56号
2007年3月20日　発行
関西大学地理学研究会
〒564-8680 吹田市山手町3丁目3-35
関西大学文学部地理学教室内
Tel：06-6368-1121（内線4890：大学院生室）
e-mail：moto@ipcku.kansai-u.ac.jp
URL：http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~moto/KU_Geography/index.html
郵便振替：大阪00970-4-81149